
Crack!!

安西 真

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Crack!!

【Nコード】

N4190N

【作者名】

安西 真

【あらすじ】

2082年、人は大地を捨てた。

グランド・ブレイク後の空中都市『ターミナル』、その中の『第3ターミナル新東京』で、今日も『クラッカー』長瀬裕也は嫌がりつつも、自慢？ の『クラッキング』の腕と『悪運』の強さで平凡な日々を夢見て、自分から？ 事件に巻き込まれていく……

序章 事件の発端と不幸体質（前書き）

初投稿です。誤字脱字がありましたらどうぞ。

序章　事件の発端と不幸体質

P M 0 : 2 4

少年は走っていた。

建設から10年経ったというのに真新しさが残るビルの外壁が連なる路地を、少年は走っていた。

特に何も変哲もない風景なのだが、辺りは妙な気配に包まれていた。

静か過ぎるのだ。

いくら通りから外れた路地、とは言ってもこんな昼時に少年の足音しか聞こえないなんて事は、普通はありえ無いただろう。

それに少年の様子もおかしかった。

10分間、少年は走り続けているのだ。

別にそれだけなら何もおかしい所など無いと思うが、その走り方はどう見ても全力疾走の物なのである。

全力疾走で10分間、これがどんなに辛い事か実際にやってみれば解る事である。

現にその表情は苦悶で歪んでいるし、只ならぬものさえ感じ取れる。よく観察して見れば、恐怖で歪ましているとも考えられた……もし彼女との待ち合わせに遅れて行くとしても、そこまで顔を歪ますことはないだろう……まあ、その彼女がよっぽどの鬼なら分らないが……

……とにかく、様子がおかしいのだけは確かだった。

だが、何がこの路地で起きているかは解らない……少年は何か咳いているが息切れしているため、

「……な、つうは……ぜ……」

という風にしか、聞き取る事ができない。

これだけ事で、傍目からは何が起こっているかを判断するのは難しかったのだが、それは直ぐに解かる事になった。

突然、空気を切り裂く様なシュツ、という音と共に、少年の足元の路面が爆発したか様に軽く吹っ飛んだのだ。

少年はバランスを崩すも構わず走り続ける。

少年はその瞬間、クソツ、と言葉を漏らす。

聞こえたのは銃声。

起きた爆発は銃弾の衝突。

もう何が起きているかは誰の目から見ても分るだろう……

この路地で行われているのは命のやり取り、それも一方的な虐殺、と呼べる物だ……

そう、少年はその背後で行われている惨劇から必死に逃げているのだ。

例えば、虐殺と言ったら南京大虐殺、ユダヤ人大虐殺、天安門事件などが挙げられるが、それらの殆どに軍が関わって行われている。だが、もし軍の攻撃であるとするれば、町中がパニックになって無ければおかしいし、第一、現在そんなことをすればあつと言う間に国際非難の対象になってしまう。だからこれが軍の攻撃である可能性は薄い。

では、一体何なのだろうか。

少年も後ろで虐殺が起きている事は解っていたが、一体誰が何の目的で行っているかは解る筈も無い。

「……っ！」

今度はシュボボツ、と空気の抜ける様な連射音が響き、少年の足元を連続して破壊していく。黒に近い青色で出来た路面は、発泡スチロールの様に碎かれ、破片が宙に舞う。

（避けられないっ！）

咄嗟にそう判断した少年は、地面を蹴り横の通りに飛び込むようにして避ける、ドサツ、と言う音と共に少年は頭から地面に突っ込む。咄嗟に腕で頭はガードしたが、全身を打ちつけた為に、ありとあらゆる所が痛む。だが気にする余地はない。恐らく、すぐ其処にさつき少年を銃で撃った人物がいる筈だ。少年は呼吸を整えながら思考を廻らし今、この場の状況についてどのように対処すべきか考える。

「軍の攻撃、んな訳が無いか………無差別殺人………だったら路地でも騒ぎになつてなければ、ハア………幾らなんでもおかしい………それに俺が狙われてから10分、ハウア………騒ぎになつてもいないし警察も着いた気配すらない………だったらこれは………この状況一体………」

と少年が呟いた瞬間、

『テロリズム、って奴だよ………それ位分るだろ?』

「っ!？」

前からスピーカーカーで拡声せれた声が響く、少年は恐る恐る顔を上げる。するとそこには背丈が3mはある人型の何かが立っていた。だがそれは人型の割に頭部が大きく首も無い、肩幅はやけに広いが腰にいくにつれて狭くなる。足は腰の真横にくっ付けた様に取り付けられ、常に膝が曲がっている。そして手には黒光りする………ゴルフボール位の大きさの物体を吐き出せる穴が付いた縦長の物体を………

…人型ではあるが、人間とはあきらかに違う異彩を放っている……
表情は無かったが、まるで少年を嘲笑っているかの様だった。

正体は強化外装甲^{RES}、つまりパワードスーツだ。それが100キロは有ろうかという機関銃を構えて立っていたのだ。

『悪いけどこっちも暇じゃないんだ、これ以上人質を取っている時間が無くてな……運が悪かったと諦めてくれ』

いきなりの死刑宣告である。

黒光りする機関銃は日の光を反射し、何とも言えない様相を呈していた。

殺される。

それに対する恐怖の感情が、体中を支配していたが、少年の思考は今までに無いほど活性化していた。いわゆる走馬灯ってヤツなのだが……

だがここで、頭が真っ白にならなかった事は褒めるべきだろう。

（どうする？ どうする？ またさっきの路地に戻る？ いや……

そうすればさっきの奴の弾の餌食になる……目の前のRESを突っ切る？ ……その前に潰れたトマトになるか……じゃあどうする？

こんな状況じゃ命乞いも交渉も通用する訳が無い！ ……どうする？ どうする？ ……仕方ない……ここは一か八かだ！）

そして少年は賭けに出た。

『じゃあ……お別れだ』

そう言っただけの目の前のRESはガシャ、と音を立てて巨大な銃を再度構える。その光景はさながら、映画の中のワンシーンだったが、それはスクリーンを飛び出し少年にとっては『目の前の現実』となっている。少年はこの脅威を何とかしない限り、数秒後にはトマト

に向かって拳銃を撃ったかのように弾け飛び、肉の塊になるだろう

……

はつきり言つてあまりにも時間は無かった。

こんな状況で考え出される策など普通はたかが知れている。

そう……普通ならだ。

そしてモーターの駆動音が唸り、ペットボトル位の大きさは有ろうかという巨大な引き金を引き、惨劇が今、起ころうとした瞬間、
「つまっ待ってくれ……」

と少年はRESに向かって話しかけたのだ。

かろうじて銃弾は、その直径5cmはある巨大な穴から吹き出されることは無かったが、少年に対する脅威が過ぎ去った訳ではない。

「……何のつもりだ？ ……言つとくが命乞いは受け付けないからな……」

とRESは地獄から響いた様な低い声で返答する。

恐らくテロリストは、命乞いや交渉の類が来ると思っていたのであろう。だが……それは直ぐに裏切られる事になった。

少年は続けて軽い調子でこう言った。

「いや〜昔っからRESには興味があつたんだよね……だから最後に1枚だけ写真を撮らしてくれ！」

「……はっ!？」

……間抜けな声が昼の路地に反響した。

>>>>>>

「……何のつもりだ？」

テロリスト今井修司は困惑していた。

てつきり俺は目の前の少年から何らかの交渉が来ると思っていたのだが、少年は、

「いやつ、別に良いだろうが！　ただ好きな物の写真撮って何が悪いんだ！？　それとも何か？　お前、この『ミリタリーマスター』と呼ばれ続けた俺の趣味にケチつけるつもりかぁ！？」

と続けた。俺は余計に困惑した。仕事柄、この手の人間と接する機会が無かったから、というのもあるが……

とにかくここは落ち着かせるのが先決だろうな……

俺は何とか少年を落ち着かせようと説得を試みるが、

『……いっいやそれはどうでも良いだろう……第一、お前、写真撮っても死ぬだろ？……別に要らないんじゃないのか？　それに今はそんな問題じゃ「気分の問題だツ！　撮って死ぬのと撮らずに死ぬのじゃ大違いだっつの！　こんなRES前にして写真撮らずにして死んだら、化けて呪ってやる！！」無いのか……』

……失敗してしまった。しかも額に汗を流して……熱入っちゃったかな……これ……とつ、とにかく、少年は何故だか知らんが自分の世界に入ってしまったようだ……それに

俺にはサッパリ解らない。普通こういう時は命乞いするのがセオリーじゃないのか！？

俺にはサッパリ解らない。何故そこまで写真を撮る事に執着する！？

そう考えると目の前の少年が一体何をしたいかが、まるで解らなくなってしまった。

そして何故銃を突き付けられてコイツはニヤニヤと笑っていられる！？

今井修司は狭いヘルメットの中で大量の汗を流していた。

駄目だ……………止まらない……………

ああ……………ヤバイ……………RESの人こつちを怪奇の目で見てるよ……………

……………もう俺の人生オワタか……………

俺は既に物凄くネガティブな思考のドツボにハマって、デジャブを感じていたが……………俺の考えとは裏腹に

『……………何がそんなにおもしろい？』

んんっ？ そりゃ死にかけて恐怖で笑いが止まらないただだつての。

「ああっ、こんなに良い機体を撮れる事が嬉しくてさ……………つい」

……………俺、まだ演技続けるか……………っていうか誰？ コイツ？

『……………いいだろう……………』

「ふえっ！？」

一体何がいいの！？ ワッツ、ハーブン？

『……………どうした……………写真を撮っていいと言っている』

……………ジーザス……………奇跡起きたよ……………

>
>
>
>

俺は目の前の少年に写真を撮る事を許した。

いや……………これは死に行く少年の最後の願いを聞いただけで決してこの少年の……………なっ何ていうか恐怖つか、おぞましさって言うか……………執着心って言うか……………とっとにかく押し切られた訳じゃ無いからな！ そっそうだその通りだ……………！

……………まあっ撮る事を許したのはいいんだが……………やけに注文が多いな、コイツ……………

コイツが急に軽い調子で

「おお、どうもどうも、おおきにな」

って言いながらP.I.Tを取り出した後……

「そこもうちヨイしつかり機関銃構えて」

「左ひじ、もつと閉めて」

「んん？ もうちヨイ左足前かな？」

てな感じのがやけに多い……

……それに文句を言えない俺は律儀なのか？

……はあ……いつその事撃ちまおうか？ ……いや、今撃

つと呪われそう……マジで……

『……まっまだなのか……？』

「いや、もう少しですよ」

……コイツ、一体それを繰り返したと思っている……

『なあつ、そろそろいい加減に「黙れ！ そっちは命狙って来てんだろつが！！ それに見合った対価くらい払えよ！！」……分つたよ……』

……何なんだコイツ？ 何様のつもり何だか……死ぬ間際の癖に

……って、あれ？ ちょっと待て、コイツ、写真が命の対価でいいのか？ どう考えてもつり合う訳無いと思うんだが……こ

んな事気にした方が負けだと思うが、お前、人生ホントにそれで良いのか！？ こんな事で命落と……はっ、まっまさかコイツ、俺そ

んな気分にして、罪悪感で押しつぶすつもりか！？ 今までののはその為の誘導だったのか！？ でっでもそんな事でどうにかなると本

気で思っているのか！？ 無い無いっ、一応俺はテロリストだぞ……そんな程度の事でテロリストをくだせる訳無い！

俺が思考のドツボにハマりかけた時、

「ではではいきますよ」

と少年から声がかかった。

タイミング悪っ！？ でっ、でも……やっ……やっ……と終わったか……もう5分は経ってるな……でもこれでやっ……と解放されるか……

……

そう思うと妙な喜びと何故か罪悪感があった……………

最後に少年は画面をピコピコ押しながらP.I.Tを構えて

「はい、チーズっ」

と言った。俺は同時に安堵のため、溜息をついた。

だが、ここまで、俺は自分が嵌められた事に気付く事は無かった。

少年が決定ボタンを押したその瞬間、

「っな！？」

いきなりブオン、と音を立ててRESの電源が落ちたのだ。

「ーッいつ一体何を！？」

突然の事に慌てふためく俺に対し少年はそれが当然の事の様に、

「馬鹿めっ、知らない人の言う事は信じちゃいけません！」って、

その歳になるまでお母さんに習わなかったのか！！

と言った。

そんな馬鹿な！？

少年は更にRESに向かってドロップキックを食らわしてくる。

電源が落ちているため、バランスを直す事の出来ないRESはそのまま後ろに倒れこむ。

ズウン、と音を立て俺ごとRESは倒れた。

今気付いたが、何て卑劣な奴だ！

「ーっひっ卑怯な！」

俺はそんな叫び声を上げるが……無駄だった。

この時少年の顔は既に悪魔の様な笑顔になっていた。

「卑怯？ オイオイ、そんな事言ってる奴が戦場に出る資格がある
と思ってるのか？ これは一応、命のやり取りだって事を忘れてる
のかっ！」

うつ、嘘だろーーーーーーー！！ たっ確かにその通りだ
が、さっきまであんな馬鹿丸出しだった奴の言うセリフじゃねえだ
ろー！！

そう心の中で絶叫すると、何故だか目が潤んできた……

「ダイダイよ」そっちが油断して俺にP I T出させたのが問題だろう、そのおかげでこっちはその間に『クラッキング』出来たけどよ……言つとくがそのR E S、メモリーフォーマツトしちまつてるから工場にでも持ち込まねえ限り動かないけど」

そつそんな馬鹿な！！ このR E Sのアクセスコードはたださえ侵入が難しいのに……しかも今は1分ごとにアクセスコードが変わるモードA (mode Attack《戦闘中》)だ！ そんな事をバレずに……しかもP I Tで行えるなんて団長並……いや、以上かもしれない……

この時俺は今までに味わった事の無い恐怖に包まれていた。

この少年の言動や行動は以上に怪しかったが、その怪しさ故に！俺は冷静な判断が出来なくなつてしまつていたのだ！ だから『クラッキング』しているだなんて解る筈も無つたのだ！ ……しかも

仮定しよう。あの時命乞いをしていたら……俺は迷わず銃をぶつ放していた……

仮定しよう。あの時奇妙な笑みを浮かべ無かつたら……俺は恐怖を感じず、呆れて少年を肉塊変えていただろう……

だから俺は少年の『クラッキング』の腕前もさる事ながら……少年の演技力の方に恐怖を感じていた……

少年の行動は全部この為の布石っ！ あの笑い声から！ あの汗までだ！

俺はこの瞬間、自分がどんな怪物と対峙していたのかと思うと冷や汗が止まらなかった。

恐らくコイツは団長並みの化物だ！ いや、もう同レベルの……下手するとそれ以上かもしれない……

「おやおや、どうしましたか？ 今になって怖くなりましたか？

何なら、怖くない様に一瞬で爆破して上げますが？」

……もうはつきり言う、誰でもいいから助けてくれ……
コイツをどうにかしてくれーーーー！！！！

「そいつは困ったね」

「っ！？」

俺の心の絶叫が届いたのか、少年の後ろには何時の間にか1人の男が立っていたのだ。その男は童顔の割に体から感じる気に、黒いモノを持っていたが……

俺はその男を見て……

『……団長………』

涙腺から液体が出て止まらなかった。

>>>>>

………はぁ………

何かよく解らないけど……取りあえず助かったのかな？

………何か、自分でも………怖い………

「おやおや、どうしましたか？ 今になって怖くなりましたか？

何なら、怖くない様に一瞬で爆破して上げますが？」

………一体俺のどこにあんなドSの長瀬さんがいるんだろう………？

ちなみに爆破はハツタリだ………

………はぁ………

………取りあえず………どうしよう………？

流石にRESの中、三十路近そうなんだけど、今にも泣きだしそうだし………

流石にやり過ぎちゃったかな………？

………もういいや………早く逃げよう………

「そいつは困ったね」

「っ!？」

俺は逃げようと思ったら、いきなり後ろから声を掛けられたのだ。そこには20代前半と思われる少し童顔の男が柔和な笑みを浮かべて立っている。体からはやけに黒いモノを感じたが……不思議と俺に近いモノを感じてしまった……

更に男は続けて、

「そのRES、いくらしたと思う? ……何と1万ドルだよ! 家を2軒買つてもお釣りが出る位の金額なんだけど……さて、一体どう責任とってくれんのかな?」

と言い、男はマシンガンを構える。

「っなっ!？」

「君も詰めが甘いよね、さつきから散々後ろから銃で撃つてたんだけど……僕が後ろから来ると思つてさっさと逃げれば良かったんじゃないかな? 『クラック』さん?」

「……っな……」

コイツ……何で俺の事……

「その通り名はこの業界じゃ結構有名だからね……第一あの短時間でRESのアクセスコードをPIITで解く、なんて芸当が出来るのはこのターミナルじゃ、君と僕を含めて3人しか居ないだろうからね……」

「……お前、エレクトロニクスパソコン狂戦士か……?」

「ご明答……でもその名前あんまり気につて無いんだよね……それに君の方が僕より有名だろ?」

「……別になりたくてそうなった訳じゃないんだけど……」

「ふうん、そうなんだ……でも結構派手な事してたじゃない……例えば都市間交通占拠事件とか? アレがきっかけで君は『電子の守護神』って呼ばれる様になったんじゃない?」

「……アレはあしなきや俺は今頃墓の中に入つてたと思うぞ?

た……

「フフフツ……じゃあ、さようなら……『クラックさん』！」

男の目に狂気の色が走り、引き金に力を入れ始める。

駄目だ！ コイツの名前の由来って『自分の容姿の事を子供関係の言葉で言われると狂戦士になるらしいよ？』っていうとんでもないくだらない内容だった！ すっかり忘れてた！ これって……オワタか？

と思いながら、俺はこの19年間起こった事を、ガチで走馬灯を見ながら思い出していた。

……俺は死ぬのか……思い残せば短い人生だったな……あつ、昨日買ったばかりのゲーム、まだやって無かったな……クソッ、楽しみにしていたのに……

「それは困ったわね」

「……っな……」

いきなり横槍を入られた二人は声のした方向を同時に見る。

そこには肩くらいまである黒髪を頭の後ろで束ね、同じく黒の戦闘服様な物に身を包んだ高校生位の眼光が鋭い、気が強い系の美少女が立っていた。

2人とも同じ様に驚いた風に見えるが、どちらかって言うと男はいきなりその人物が現れた事に驚き、少年はただ色んな事が起き過ぎて、頭が混乱している様だった……

「……何やってんのよ、『クラック』」

「……」

「……相変わらず重要な時に答えないわね……」

……それはただ頭が混乱しているだけなのだが……

「……はあ、どうせアンタの事だからその不幸属性とやらを、思っ存分発揮しているんだろうけど……」

……悔しいが、それに対しては言い返せない……

そして彼女は一通り状況を把握すると、

「ねえ、その童顔の人」

と、男に向かって言った。

ピキッ、とまた空気が張り詰める。気のせいか、さっきより黒いモノが増えた気がする……

またやつちまったよ……この人は……

俺があちゃー、と考えていると彼女は、

「ソイツはヘタレだけど一応ウチのメンバーだし、実績も出しているし……悔しいけど借りもあるから死なれちゃ困んのよね……だから」

と言い、少年に銃を突きつけている男の方に向きなおった。

……というか俺の存在って『一応』なんだ……

「だから？ 何です？」

と男が苛立ちを込めて聞き返すと、少女は唇の端を吊り上げ言った。

「アンタを倒させて貰うわ!!」

これを合図に戦闘が開始された。

これが『第3ターミナル新東京』で起こったある事件の幕開けだった。

序章 狂戦士の理由 (前書き)

ちよつと無理やりかもしれません……

序章　狂戦士の理由

戦いとは楽しんで行つモノ何だろうか？

これに対しての俺の答えはNO、だ。

死ぬかもしれない……そんな事がある戦いは、何かしらの信念を
持つてやるモノ

と、俺は考えていた。

だが俺は考え方を変えなければならぬかもしれない……

この場合はどうだろうか……

楽しんで殺し合いしている……

これは戦いなのだろうか？　それとも単なる遊びなのだろうか？
はたまた別の呼び方があるのだろうか？

……あえて言うならそいつは純粋な狂気を持った子供だった……

>
>
>
>

PM 0:47

「アンタを倒さして貰うわ！-」

こんな一言から始まった戦闘だったが始まってから10分、戦局は酷く一方的な展開となっていた。

「……っつ……ぐふ……」

少女は起き上がるうとした所を男に蹴られて転がる

「おやおや、大丈夫ですか？ 大分辛いようですが……」

そう言った男の口調は、明らかな嘲笑があった。

「……誰が……そんな事……」

「……そうですか……なら良いのですが……」

男は拳銃を少女に向かって構える。その眼には狂気が浮かんでいた。

「では……今度こそお別れです」

「……っクソ……」

この眩きが少女の物であったか、はたまた少年の物であったのかは解る事は無かった。

ただ、一つだけ確かな事はこの後すぐに、コイルガン特有の、スパッアン、という射撃音が響いた事だけであった。

>>>>>

PM 0:37

「ジャマよ、『クラック』……」

少女はそう言うと、少年と男のもとに向かって獲物に狙いを定めたチーターの様なスピードで駆け出した。

「っ……」

男は慌てて銃口を彼女に向けて構える。だが、

「っな……」

マシンガンが、シチューに入れられた人参のように乱切りされ、様々な部品がバララッ、と地面に転がったのだ。

「っハアアッ!!」

少女はそれを気にも止めず男の顔面に右の拳を一発入れる。

「っうー!!」

だがそれをギリギリの所で頭を捻じって男は避ける。

更に男は頭だけでなく、体も捻じりその勢いで少女の脇腹目がけて蹴りを放つ、

「ーッハ!!」

そこを少女は1.5mという、常人には到底真似出来ない垂直飛びを見せそれをかわす。

「ッハアアアー!!」

更に少女は空中にいるままの姿勢から体を捻ると、右回し蹴りを男の側頭部に向けて放つ、

「ーッ!!」

だがそれを男は左腕でガードすると、そのままの姿勢でバックステップをし後ろに退った。

今までの攻撃も常人には到底真似出来るモノでは無いし、はつきり言つて、どの攻撃も当たれば決定打になりかねないモノであったがそれ位だったら一流の格闘家なら出来るものである。だが、それが今の戦闘開始から『5秒』という時間内に全て放たれたと考えると、2人のレベルがどれ程高いかが解ってくる。

2人の間に距離は5m程あったが、これはまだ2人にとって、間合いと呼ぶには余りにも狭い距離であるのだ。

そんな中で、

「MAC (Movement assistance clothes 《運動補助服》) ですか……それにしても身軽ですね……」

などと男は口を開いた。

すると少女は言った。

「伊達にこれを身に着けてんじゃ無いのよ、狂戦士さんッ!」
バーサーカー

少女はまたさっきの様に、高速で男に接近し攻撃を加え続ける。

「つつ……これは……避けるのが……大変ですね」

1秒間に何度も攻撃が交わされる世界。その中で男は軽口を叩いて見せた。

男は、彼女の戦闘スタイルを分析する

(……相手は典型的なボクシングでいう『ファイター』ですか……それに空手やコマンドーを足した様な物ですね……これは一回距離を取った方がいいでしょうか？……いや距離を取っても直ぐに懷まで潜り込まれるでしょうね……ならばカウンターを狙った方が得策ですね！)

そう読んだ男はワザと高速戦闘ではあまり多用しない右回し蹴りを少女の頭目がけて繰りだす。

目論見どおりそれを掻い潜って避けた少女は、筋書きどおり左アッパーを男の顎に向けて放った。

(予想どおりです)

男はそれに合わせ、打ち下ろしの右を放つ。いや、放とうとした。つつ！？」

何故か男の手は中途半端な位置で止まり、それ以上動く事は無かった。

「ッハアアアー！」

それを少女が見逃す筈が無い。少女はそのまま左アッパーを男の顎目がけ、振りぬいた。

「グフツ……！」

男はそう言い残すと、綺麗な放物線を描き、ズサツ、と地面に落下した。

「……………」

余りにも呆気ない幕切れだった為、少年はしばらく口を開けたままポカン、と立っていたが、

「…………何やってんのよ『クラック』…………早く後ろに退きなさいよ…………」

「……っああ……」

と促され、男の飛んで行った方向とは逆の方に退って行った。

少女はその事を確認すると、

「……さて、狂戦士さん？^{バースカー} もう気絶しちゃったの？ ……随分早い幕切れじゃない？」

と言った。

それに対して狂戦士と^{バースカー}呼ばれた男は、

「……あゝ痛ててて……随分と派手に飛ばしてくれますね……」
と、片膝立ちの体勢になりながら返す。

それに対し、少女は、

「そう？ もしかしたら後ろのバ力を殴り飛ばすのに慣れたせいかもね？ 何ならもう一回サービスして上げるけど？ どうする？^{バースカー}

狂戦士さん？」

などと言い放った。若干後ろの少年の顔が引きつるが、狂戦士と^{バースカー}呼ばれた男は軽い口調で、

「いえ、自分は寧ろ殴りたい方の趣味なんでね……遠慮しときますよ……それと、出来たら僕の事を狂戦士では無く『神崎鍊』^{かんざきれん}と呼んでくれないか？ あんまり気に入って無いものでして……」

と言う。

「そう？ じゃあ神崎さん、大人しく捕まる気は無い？ 今なら宿泊費三食込みで無料の刑務所^{ホテル}に案内してあげるけど？ どうかしら？」

少女は男に投降するように促す。だが、

「……生憎自分を殴った相手に捕まる趣味じゃ無いんですよ……それにいきなり銃を分解した危ない相手になんかわね……でもそのタネとあそこで手を止めさせるほどの悪寒の正体を教えてくれたら、気が変わるかもしれませんよ……？」

と返した。少女は眉を軽く引きつらせながら言う。

「そうね……あなたを捕まえたら教えてあげても良いわよ？」
すると男は顔を顰めながら、

「……残念ながら交渉は決裂です……僕は捕まる気は無いですから……」
と言う。

すると少女は右腕を左肩の近くまで持っていき、

「そう……それは残念ね!」

と言いながら右腕を左から右へと振り回す。

何でも無い動作に見えるが、それに殺気を感じた神崎は慌てて左に転がった。

その判断は正しかった。

フィユン、と音を立て、黒い髪の毛の様な物体が神崎の頬を薄く切り裂いたのだ。

「っう!?!」

神崎は目の前で起きた現象に戸惑いを隠せ無かったが、痛みで直ちに冷静さを取り戻す。

そして、今何が起きたか考える。

答えは以外にもすぐに出た。

「……系……『バサカ狂乱の系繰り』、かつらぎみお葛城美緒さんですか……」

「あらっ? バサカ狂戦士さんに名を知って頂けるなんて光荣ね?」

と言いながら彼女、葛城美緒は腕に取り付けた黒い箱の様なものを叩く。その先からは確かに細いが系の様な物が出ていた。

「……その名前は『公安』の中じゃ有名な方ですよ……何でも、都市間交通占拠事件では当時、まだ一般人だった『ながせゆうや長瀬裕也』さんとコンビ組んで事件を解決したとか何とか?」

それを聞いた美緒は肩を震わせながら、

「……その事は余り言わないでくれる……? はっきり言って何で後ろのヘタレに助けられたんだろう? と今でも考える時がまだあるから……」

と、答える。それをからかう様に

「そうなんですか? てつきり仲が良いのかと思ってましたよ……すいません、まだその『バサカ繰系』で切り刻まれたくないものでし

てね……」

と、神崎は肩を竦めながら言う。

「……よくご存知ね……」

「カーボンナノチューブ製の系を使った兵器なんて、それ以外に知りませんから……」

と言った。

そう、彼女は系を操っていたのだ。それもカーボンナノチューブという特殊な系だ。

（カーボンナノチューブ……鋼鉄の20倍以上の引っ張り強度を持ち、アルミニウムの半分の重さ、更に種類の組み合わせによって電流を加える事で自由に形を変え、その電流で発生した熱量で目標切る性能を更に向上させている……それに細すぎて殆んど視認不可、って訳ですか……）

神崎はそう考えながら一言呟く、

「……悪魔の兵器ですね……でもそれは、倉庫で埃被っていたと思うんですが？」

この神崎の疑問に対し美緒は、

「……そうね、でも私が来るまでEBC（Electronic brain image control system《電子脳思考制御システム》）を通して誰も使えなかったんだから……でもそれは自分を選んでくれた、って事じゃ無いのかな？ それに悪魔呼ばわりなんて、私には出来ないわね……」

と、答えた。

EBCとは電子脳、つまり脳内に設置した電子脳と呼ばれるいくつかのポイントの事を差す。この人工的に設置した機械と脳が、電気信号のやり取りをする事によって、例えば考えるだけで機械を動かしたり、声を出さずに会話が出来たりする機能の事だ。

武器への信頼を寄せる美緒に対し、神崎は、

「……あなた自身が悪魔なのかもしれませんね……」

と言った。表情を一瞬でシリアスからコメディーに作り変えると彼女は、

「なっ……何おうつ!!」

と、慌てて返事を返した。そんな彼女に対し、神崎は止めを刺すように言った。

「……後ろの人も同意しているようで……」

ガバツ、という効果音と共に後ろを振りかえると、そこには首を大きく縦に振りながら目を閉じ何か呟いている、後ろの少年こと長瀬裕也の姿があった。

ここからは、何を言っているかは聞き取る事が出来ないが、口元を見ると彼は「……悪魔……魔王……女王様……」と言っている様に見える。

彼女は顔を熟したトマトの様に真っ赤になると、

「……アンタ……後で荒縄縛りの刑ね……」

と、ホントに魔王の様な声で宣告した……

「ごめんなさいっー!!」

裕也はズシャー、と効果音がする勢いで土下座をするとそのまま動かなくなった……

美緒はそれを見るとプイツ、と少年から視線を逸らし再び神崎の方へと振り返る。どうやら彼女は神崎に対する愚痴があるようだ、

「……あなた……性格悪いって言われない?」

と、漏らした。

それに対しての神崎の答えは、

「いいえ、悪い人だとは言われた事はありませんが?」
だった。

はつきり言つてどっちも変わらないのだが……

美緒は呆れてハァ、と肩を降ろすと、再び戦闘の構えに戻り言った。

「……茶番は済んだわ……そろそろ決着を着けようかしら?」

「……そうですね……僕もそろそろ待ちくたびましたし……でもなかなか面白いものも見れましたよ……」

また美緒は姿勢を崩すと、

「……あなた、ホントに悪い人ね……」

と、呟いた。

「よく言われますよ」

と神崎が返すとはあり、と彼女は、もういいや……という表情で目を瞑る。

だが、その後一回深呼吸をし、2秒ほど精神を集中させ、カアツ、と目を見開いた時には、その表情は唇を吊り上げた、悪魔の様なモノになっていた……

恐らくこれが彼女の戦闘時の表情なのだろう。

「じゃあ！ 行くわよ！」

と言いながら彼女は大きく腕を交差させ振りかぶる、その様はまるで指揮者のようであったが、これが彼女の戦闘姿勢なのである。

一方神崎の方は、どこから出したのか？ 両手に拳銃を持って、腕をダランと下げている。

一見すると無防備だが、その構えは本人にやけに馴染んで見える。恐らくこれが、彼の本気の構えなのだろう。

「………」

両者は見合ったまま10秒程動く事は無かった。だが、その間に起きた駆け引きの数は、その秒数を遥かに超えていた。

「……ッハッ！」

最初に動いたのは美緒だった。

彼女は両手を交差させながら神崎に向けて疾風の如く駆け出す。それに対し神崎はその場に立ったまま全く動こうとしない。

「ッハアアアア！」

彼女は距離を縮めながら右腕を横薙ぎに振るう。同時に鞭を振るった様なフオン、という音が響く。

「っつー！」

神崎はそれを1m程、飛び上がりかわす、だが、靴の一部が少し触れたのかつま先の一部が削れている。

「っつー……」

神崎は空中に居ながら拳銃を発砲する。スパアンスパアン、とハリセンで頭を叩いた様な音がこだまする。空中で発砲したにも関わらず体勢を崩さなかったのは神崎が持っている銃が『コイルガン』だったからであろう。

（コイルガン……鋼鉄の銃弾を磁力によって加速し打ち出す銃、火薬を使わない為、衝撃が少なく消音性も高く連射にも優れた万能の銃ってところかしら……でも弱点が無いを分けじゃ無い！）

と考えながら美緒は神崎との距離をどんどん縮めていく、普通なら確実に銃弾が当たる距離なのだが、一向に弾が当たる気配が無いそれは神崎の腕が下手、という訳ではなく、美緒が銃弾を避けて進んでいるからである。

そんな、人間離れた事なんて出来るわけ無いと思うが、それは彼女の見ている映像秘密があるのだ。

アウトプット

インプット

EBCには一方的な出力だけで無く、脳への入力機能が付いている。つまりそれは会話であつたら、言語野に直接、電気信号を送り、映像だつたら直接、視覚野に信号を送るようになっていたのだ。

だから彼女はその映像に細工をしているのだ。
今、彼女が見ているのは、照準の方向と磁力の変化という、カメラからの映像なのである。

つまり彼女は銃口が今何処に向いているかを知り、コイルガンの磁力が変化した瞬間その部分を体から逸らして銃弾を避けている、という事をやってのけているのだ。

簡単な事に聞こえるのだが、磁力の変化があつてから銃弾が彼女に届くまでの時間は、あつても0.2秒。ストップウォッチで確か

めてみると分るが、普通にボタンを連打する位の時間が0・2秒位になる。丁度、人間の反応スピードの限界が0・1秒位だから彼女の行為は神業ともいえるモノなのだ。

「……人じゃないですね……」

「あら？ そう言うあなたこそ人間離れしているとおもうけど？」

銃弾をかわしながら接近してくる美緒に軽口を叩く神崎に対し、彼女も軽口を叩いて返す。

そして彼女は再度腕を横薙ぎに振り、神崎の首を切り刻もうとする。

「っおつと！」

それを屈む事で避けた神崎は、その屈んだ姿勢から飛び出す様に美緒に接近する。

同時に左手に持っている銃で殴りかかる。

「ッうー！」

それを美緒は右腕のプロテクターでガードする。否、ガードさせたのだ。

それに気付いた美緒は、左手で神崎の右手に持っている銃を弾き飛ばす。

カンッ、カララーと銃が路上に転がる音が響く。

両者共に武器が抑えられ、動く事の出来ない状況で2人はニィ、と口元に笑みを浮かべる。

「……こんなに楽しい事は久しぶりね？」

「おや、そつちもそうですか？ ……そうですねここまで付き合える相手は中々居ませんからね」

……1つ言つて置くが、この2人はさっきの長瀬の様に恐怖で笑っている訳では無い。

純粹に楽しんでるのだ。

……そう、まるで子供同士のじゃれ合いの様に………純粹に殺し合う事を楽しみとしているのだ。

……だがそれを知っていた裕也は美緒の事を見て、何かぎこちない笑いだ……

あの時都市間交通占拠事件みたいに純粹に楽しんでないと、何故だか思った。

硬直が続いて10秒、

「……あなた忘れてない？」

美緒が神崎に問いかけた。

「……何をです？」

それに対して美緒は唇の端を吊り上げ言った。

「……私の武器の性能よ！！」

その瞬間、神崎の左肩からブシュ、と血の柱が上がったのだ。

「っな……！？」

神崎は左肩を押さえるとバックステップを取り、美緒との距離を取り口を開く。その瞬間、左手から銃がこぼれ落ちていた。

「……なっ、何ですかアレは……」

武器を無くした、その口調は焦りを感じさせる物だった。

「……そうね、私の『繰糸』は自由に形を変えられるって事は知っているわよね……」

彼女は愛用の武器を見ながら言う。

「……知っていますよ……でも腕を動かさなければ物を斬れませんよね……」

その通りだ。彼女の『繰糸』は自由に形を変えられても『腕を動かす』などの動作が無い限り、物体を切る事が出来ない筈なのだ。だから銃をガードしていた右腕が動かせないと肩を斬るところか、防護服1枚すら斬れない筈だ。だが彼女は、

「あら？　ちゃんと動かしていましたよ、腕。」
と言った。

「……おかしいですね……あの時右腕は……はっ、まっまさか？」
神崎は何かに気付いた様な顔になった。

「……ようやく気付きましたか……私が何時いつ『繰糸』は1つだと言ったのですか？」

「……………」

そう、彼女は始めから両腕りょううでに『繰糸』を装備していたのだ。

比較的簡単なトリックだが、この様な戦闘せんかいでは最初から全力を持つてして戦う事が多い。それは隠し玉を持っていたとしても、使わずに戦闘が終了したり、使い所が限られてしまったりする事が多い為、『最初から全力を持つてして戦った方が得策』という考え方が多いのである。

だから、戦闘のプロは最初から本気で相手にかかる場合が多いのだ。

しかし、逆にプロだから裏の裏をかく事もある。

「……裏の裏をかがれましたね……あなたにも隠し玉があったという事ですか……………」

「その通りよ、本来『繰糸』は2本で使う物。2本の糸で相手の逃げ場を無くして攻撃するのが本来の使い方……もっとも、私もつい最近にやっと使える様になったんだけどね……………」

と、言いながら彼女はヒュン、と左腕を振う。

「……どうする……今なら捕まえるだけでお終いよ？　私も牙を無くした狼に止めを刺すのは気が引けるのよ……………」

という彼女の問いに対して神崎は、

「……いいえ、それを聞いて安心しました。もつととんでもない物と思っていましたから……それに、あなたは勘違いをしている。僕のまだ牙は折れていませんよ？」
と答えた。

美緒は一回深呼吸をする、その手が震えていたのを裕也は見逃さなかった。

「じゃあ、仕方ないわね!!」

と、彼女は2つの腕を振りながら言った。

シュツ、2つの黒い糸がそれぞれ神崎の首と腹に向かつて行た。

もう間もなく神崎の首と胴体が切り離される。と、誰もが思った。

だが神崎は小声で、

「……僕の名前の由来、って知ってます？」

と呟いた。

そして2本の糸が神崎の体に触れた瞬間。

「っなっ!!??」

ブウン、と音を立てて神崎の体が霧の様に露散したのだ。

「きつ……消えた!」

当然、美緒は突然起こった事に驚きを隠せなかった。

「どっ何処に行った!」

と彼女が神崎の姿を探していると、

『僕の名前、電脳狂戦士は、確かに僕が戦闘狂だから付けられた、

あだ名ではあります……』

「っなー!」

いきなり脳に直接EBCを通して聞こえる声が流れたのだ。

「ッ何処に!」

彼女が必死に四方八方を見て彼の姿を探していると更に、

『でもそれじゃ電脳エレクトロニの部分ニが抜けていますよね? これは一体どう

いう事でしょう?』

と、続ける。

「何処だツ!? さっさと出て来い!!」

『……正解は』

といい、EBCを通して聞こえる声が途切れる。

美緒は神崎の姿を探していたが後ろから長瀬の叫び声が聞こえた。

何を言っているかは「葛……………ろ……………」としか聞き取る事が出来なかったが、いきなり後ろから、

「僕が自由に電子脳を狂わす事が出来るからですよ」と、声が聞こえたのだ。

「っな!？」

慌てて後ろを振り返ろうとする美緒だが、

「つつつは……………」

何時の間にか拾った銃で後頭部を殴られ、地面に倒れてしまった。

「っな……………一体何を……………」

すると神崎は、

「うゝん……………どこから説明しましょうか? ……そうですね、あなたが僕2本の糸で斬り付けようとした時、僕は一体何処に居たと思いますか?」

そんな物、美緒からしたら決まっている。

「私の……………目の前よ……………」

「そうですね、確かに僕はあそこに居ましたよ? でもアレは僕であつて僕じゃ無いんですよ」

「……………何の事……………」

「さて、ここで問題です。確かにそれは目に見えているのだけれども、実際にはそれは無い。さてこれは何でしょう?」

軽い調子でそんな問いが来た。

「……………幻覚?」

「そう! 正解です。僕はあなたの電子脳に『クラッキング』して視覚野と言語野に偽の僕の存在の情報を流したんです。だからあなたが見ていた僕は、僕であつて僕じゃないんですよ」

「……………」

言葉にすら、ならなかった。

最初から勝負は決まっているも同然だったのだ。

向こうの方が何枚も上手だった。神崎の行動には始めからちゃんという意味があつたのだ。

まず、普通の戦闘をして相手の实力を知り、そして相手が手強いと判断したら、一旦自分から窮地に追い込まれたフリをして、相手を油断させる。そこで幻覚を使い、相手が混乱した所を一気に決める。美緒が神崎を斬り裂こうとした時にはすでに神崎は、勝利を決めていたのだ。

実に計算された戦い方だ……

美緒は始めから神崎の掌で踊らされた事にようやく気付いた。

そして、美緒はここで神崎^{コイツ}には勝てない、と自覚した。

「タネは解りましたか？ 実に簡単でしょ？」

「……つつ……ぐふつ……」

美緒は起き上がるうとした所を神崎に蹴られて転がる。

「おやおや、大丈夫ですか？ 大分辛いようですが……」

そう言った神崎の口調は、明らかな嘲笑があつた。

「……誰が……そんな事……」

「……そうですか……なら良いのですが……」

神崎は拳銃を美緒に向かって構える。その眼には狂気が浮かんでいた。

「では……今度こそお別れです」

美緒は目を閉じている。明らかに死を覚悟したモノだ。

「……っクソ……」

誰かが叫び声を漏らした、次の瞬間、

スパッアン、というコイルガン特有の射撃音が響いた。

>>>>>

「……そうですか……なら良いのですが……」

神崎にこう言われた時、私は死を覚悟した。

……私のバカ……相手の情報、ちゃんと見ないからこういう事に

なるのに……

でも、もう意味無いか……私死ぬんだもんね……

後ろで力チツ、と安全装置を外す音が聞こえる。

……ああつ、もう終わったんだ。私の人生……

と考えながら、私は目を閉じる。

……考えてみればロクな事してないわね、私……ただ戦って戦って戦って、ずっと戦ってばっかの人生だったもんね……何でこうなっちゃたんだろう……？

ずっと、戦う事だけが楽しみで、それ以外に生き甲斐が無かったんだ……

……戦って勝った時が一番楽しくて、それ以外に楽しい事が無くて……

でも何時からだろう？ 戦う事が本当に楽しく無くなったのは？

……ああ、都市間交通占拠事件からだ……
あの時

……あの時初めて敵に殺されかけて、初めて死の恐怖を知ったんだ……

……あの時初めて命の重みを知って、それから殺す事を自然と避ける様になったんだ……

今日も……手の震えを止めるのに必死だった……

でも、戦わない私は必要とされない……自分の居場所が無くなるのなんて嫌だ！

だから私は戦う。

自分の居場所を守る為に戦う。

……でもそれも今日でお終い。だって死ぬんだもん……私。

……そういえば前、死にかけた時はどうしたんだっけ？

……ああ、あの裕也ヘタレが助けに来たんだ……あんなのに助けられたんだ……私。でも

そういえば何で……アイツにあんなに突っ掛かったんだっけ、私？

そういえば何で……アイツの行動1つ1つが気になったんだっけ、私？

……嗚呼っ！！ 何で死ぬ間際アイツの顔思い出してんだ！
？ 私！？

アイツの事なんかどうでも良いじゃ無い！ どうせ死ぬんだから
……でも

こういう時に家族の顔じゃ無くてアイツの顔が浮かぶのはどうい
う事だろう……？

「では……今度こそお別れです」

……気にしても仕方ないか……でも、何故だか……
もう1度裕也アイツの顔が見たい……

その後すぐだ。

何処からともなく「……っクソ！」という声が聞こえ、コイルガ
ンのスパッアン、という射撃音が響き渡ったのは……

コイルガンの発砲による衝撃と発砲音はほとんど無い、これだけで
隠密性を重視した兵器だという事分る。

その中で葛城美緒はゆっくりと目を開けた。

(……あれっ？ 生きてる？)

彼女の目の前に映る景色に変わりはない。

だが、さつきまで2つだった。影が、今は3つになっているのは
どういう事だろうか？

答えは直ぐに解った。彼女が後ろを振り返ると、

「……『裕也』……？」

そこには自分がさつき『ヘタレ』呼ばわりした男が神崎の腕を取
って銃口を私とは違う方向に向けていた……

「……つな、長瀬……裕也っ……！」

神崎のそんな叫びが路地にこだました。

>>>>>

……あつ危なかった……

俺が神崎のトリックに気付いたのは、丁度アイツが姿を消した時。
神崎が思考動作だけでEBCに『クラッキング』出来るのを知っ
ていたからだ。

……それにしても自分の姿を神崎から消してアイツの脳に小細工
してたとはいえ……今のタイミングはねえだろう！！ 後コンマ1
秒遅れてたら間に合わなかったぞ、多分……

……でも変だよな……戦闘狂の葛城が戦つてるときにあんな表情
を見せるなんて……？

俺がそんな事を考えていると下から声がかかった。

「……『裕也』……？」

……アレッ？ 葛城が俺の事名前で呼んでくれた事ってあつたっ
け？

「……つな、長瀬……裕也っ……！」

……アレッ！？ 神崎さんってそんなキャラだっけ！？

アレアレッ！？ 何か今日、色々変な事が起きて訳分らんぞっ！？
と、俺が本日2度目の思考のドツボに嵌まっていると、

「つくー……！」

神崎が俺に銃を向けて来た。

「……オイオイ、お前そんなヒステリックなキャラじゃ無いだろ？」

「……煩い……僕の邪魔をするなっ……」

と言いながら引き金に力を入れ始める。

ふん、コイツ予定外の事があると直ぐにヒステリー起こすヤツだな……メモっところ……

「裕也っ、逃げてっー!!」

いや、もう手は打ってあるから……それより葛城さんっ!? ア
ンタ、そんなキャラだっけ!?

俺が本日3度目の思考のドツボに嵌まりかけた時、

「っっ、グアアアアー……!」

突然神崎が苦しみ出した。やっと始まりましたか……

「……っっ……なっ、何をした!」

おっ! 聞いてくれますか。

「何って……ただ単純に通常の30倍の感覚情報をEBC通して頭に送り付けてるだけじゃん……」

俺がそう告げると神崎は何か悟った表情で言った。

「なっ、まっまさか今まで手を出して来なかったのはその為……」

……それは違う……だが、否定すると襲いかかって来そうなので一応苦笑いを浮かべて置く……

すると神崎はくっ、と悔しげな表情になった……

その表情は心のアルバムに残して置きたい位の滑稽な表情なのだ
が………何度も言っている事なのだが早く逃げよう……

「じゃっ、一旦退かせて貰うぜ」

「……えっ、ちょっと何を!」

俺はそう告げると葛城を担いで(いわゆるお姫様抱っこだ)、一目散に逃げ出した。

……ああ……シンド………今日は厄日だな………これ………

>>>>>

「じゃっ、一旦退かせて貰うぜ」

そう言つと彼は、私を抱きかかえながら駆け出した。

「……えっ、ちよつと何を!!」

私は最初は軽く抵抗をしたが、自分の頬が熱くなっている事に気付いて、直ぐに逆らうのを止めた。

……ううっ、一体どういう訳? こんなヤツに抱っこされた位で何で顔を赤らめてるのよ!?

そんな思考のループに入っていた私だったが、その彼の横顔を見ていると何故か落ちて着いた。

特に美形つて訳でも無い、ただの普通な青年。身長も高い訳では無く、平均より少し下。何ら特徴がある訳でも無く、『クラッキング』以外の全ての面を平均した様な人物、それが長瀬裕也だ。

「……………」

私が無言でジイー、と彼の顔を見ている事に気付いたのか彼は、

「どうした? 何か俺の顔にでも付いてるか?」

と、聞いてきた。

「っあ、なっ何でも無いわよっ!」

私はかなり焦りながら返答したのだが。

「そっそか、何でも無いか……」

彼は何故かそこは気付かなかった。

何で!?! 何でこんなにも鈍いくせにそういう細かい所だけは気付く訳!?! ……もしかしてワザと!?!

私は心の中でツツコミながら1人ボソツと呟く。

「……これで『少しカッコよく見えたなんて』言える訳無いじゃないのよ……」

それに対し裕也は本当に気付いて無いらしく、
「んっ、何か言ったか? どこか悪い事があつたら言ってくれよ?」

と本気で心配する様な顔で言ってくる。

すると私は顔を真っ赤にし、

「……ホントに悪いのはそこで無駄な心配をして来て、別の所で鈍いアンタの頭だアーーーー!!」

「へぶしっ!？」

と彼の顔面に綺麗に右ストレートを1発決める。

MACで強化されたパンチは、抱えられている状態でも常人の意識を刈り取る程の威力を持っているのだが、何とか踏み止まった彼は、

「つく、あつ、あつ危ねえじゃねえか! 倒れてたらどうするつもりだったんだ!」

と言った。

私は口を開くと

「そんな時はそんな時よ!! 第一まるで気付かないアンタが悪いんですよ!!」

と、言い放つ。

しかし彼は、

「そんな時つて、随分強引だな!？ 後、気付かないって何だ?」
全く分って無かった……

「そういう所が気に食わないって言ってるのよ!!」

と、再び彼の顔面にパンチを撃つ、

「ひでぶっ!？」

本日2度目の某アニメの断末魔が上がった。

流石に2発は堪えたようで足取りがおぼつかなくなる。

そんな彼を見て私は

「……はあ、何でこんなのに2回も貸しを作ったんだろう……」
と呆れながら言う。

だがここにも気付かない裕也^{バカ}は言った。

「……貸しって何だっけ?」

「………そういう所が気に食わないって言ってるんでしょうが!!」

「あべしつ!？」

鈍感な勇者は、^{ユウヤ}3度目の魂の叫び声を上げ、地に伏した……

後から聞いた話だと彼はこの日は色んな意味で『人生最大の厄日だっ』と言ってたらしい……

>>>>>

「うゝん、痛たたたたっ」

そんな声を上げる^{エレクトロニバースカー}電脳狂戦士こと神崎鍊は5分経ってようやく痛みから解放され、体の調子とEBCの具合をチェックしていた。

(……ホントにただ大量の情報を流し込んだだけですね……あんなマネが出来るなら脳を焼き切った方が楽の筈、なんですかね……) 神崎はしばらく考えてある答えを出した。

「……そこはやっぱ甘いんですね？」

神崎はその答えに納得した様にウンウン、と首を縦に振っていたが、ある声が聞こえてそれを中断した。

「…………団長……助けてください…………」

その声はRESの男こと今井修司だった。

「あれっ、今井君？　生きてたんだ？」

神崎は大袈裟に驚いたフリをする。
すると神崎は声を低い物に変えて言った。

「……解ってる？　君のその『お人よし』が今回の敗因になったって事……」

「…………」

確かにそうだ、今井があの時迷わずに少年を撃っていれば、確かにこんな事にならず、『クラッカー長瀬裕也』をも、仕留める事も出来たのだ。その責任は重い……

神崎の言葉に今井は何も答えられなかった。

「そのお陰でRES1機の損失だ……さてどうしてくれるのかな？」

神崎の言葉からは狂気の色を感じ取れた。

「……申し訳ありません……私の失態です……」

「ふん、まあいいや……」

と言いながら、彼は愛用のP-I-Tを取り出す。

「……知ってる？ RESのプログラムは確かに消えてるんだけど、外部にプログラムがあれば遠隔操作で動かせるって事を？」

「………？」

今井は始めその言葉の意味が分らなかったが、その言葉の真意は直ぐに解る事になった……

「……例えば、こんな感じにね!!」

その瞬間、モータが唸る音と共にグキツ、という鈍い音と男の絶叫が響いた。

「ギアアアアアア………!!!!」

その方向には1機のRESがあつた。だが、その腕を見ると人間ではあり得ない方向に曲がっているのだ。

「……っあ……だっ団長……なっ何を………」

男の悲痛な声が聞こえる。だが神崎は、

グキツ、

「ぬあああああ………!!!!」

更に膝を人間の可動域の限界より外に曲げたのだ。

「……っあひ………だっ……団ちょう………」

今井の耳を塞ぎなくなる様な呻き声が聞こえる。それでも神崎は、
「……僕、前に言つたよね？ 使えないヤツに興味無い、って!!」

容赦をしない。

「……だっ団長……た……助けて………」

今井は必死に訴えかける。しかし、

「……アイツはやらなかったようだけど……知ってる？ その
RESの動力が何なのかを？」

「……………っあ……………」

今井に答える余裕など無い。

「……正解はCNFF（Cold nuclear fusion
furnace《低温核融合炉》）、つまり核融合だ。通常は毎
秒0.01gずつ分けて核融合させてるんだけど……それを一気に
100倍にしたらどうなるかな？」

「……っな……………!!」

……今井は見てしまった……そう言う神崎の眼が玩具おもちゃを手に入れ
た子供の様に純粋な眼、だった事を……ただ、1つだけ違うのはそ
れが純粋な狂気だった事だ……

「じゃあ……………さようなら……………今井君……………」

神崎が断罪のボタンを押す。

「……止めてくれ……………」

今井が最後の哀願を試みる。

「止めてくれ……………!!!!!!!!!!」

……それが今井修司の最後の言葉になった……

ドゴアン、とRESは巨大な衝撃音と火柱を上げこの世界から消
滅したのだ。

衝撃で路地に面したビルのガラスが碎ける。だが、それが地面に
落ちる事は無い。

爆風で破片がビルの内側の方に吹き飛ばされたからである。

だが、その破片で怪我をする人間は居ない。

何故ならこの区域は既に神崎鍊のテロリストグループによって占
拠されているからだ。

爆風で様々な物体が飛び交う中、神崎鍊は変わらずにそこに立っ
ていた。その頬には破片が飛んで来て怪我をしたのであろう、一筋

の傷があつた。

燃え上がるRESの残骸を、神崎は眺めていた。すると

「相変わらずですね、神崎さん」

と、後ろから声をかけられた。

神崎は振り返りもせず答える。

「何のようだい？ 霧峰君」

するとその霧峰と呼ばれた男は、

「いいえ、ただこの区域の処理を終えた事の報告に、ですよ」

と答えた。

だが、付け足すようにある事を言った。

「ただ……酷いですね……ここまでする必要があつたんでしょうか……？」

すると神崎は、

「なに、ただ単に使えないヤツを消去しただけさ……僕は使えないヤツが大嫌いだからね……」

と言った。

霧峰はやれやれ、と首を横に振る。

すると神崎は、

「その点君には期待をしているからね。僕の右腕なんだから」
と言った。

それまで無表情だった霧峰の顔が、『はあゝ子供のお守は大変だ……』と言いたげな表情に変わる。

それを見た神崎は、

「……また、少し迷惑をかけるよ……ちょっと久しぶりの大物がかったみたいなんだ……」

と言っ。

霧峰は、

「……分ってますよ……あなたの独断先行は、今に始まった事じゃ無いんですから……」

と、諦めた表情で言った。

「ありがとう、久しぶりに本当に楽しめそうだ!!」

と、彼は歩き出しながら頬を流れる血を手で拭くと、その手に付いた血を舐める。そして彼はこんな事を咆哮する。

「……待つて居てくれよ、長瀬裕也っ!!」

エレクトロニバーサーカー

電脳狂戦士神崎鍊、その瞳には、全てを飲み込む狂気が渦巻いていた。

序章ゝ狂戦士の理由ゝ（後書き）

……序章だけで合計2万文字……先が思いやられます……

「第一章・東京事変」――裕也の長い1日――（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台は別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものは、名称が同一であつても関係はありません。

第一章・東京事変――裕也の長い1日――

『人は何故、宇宙そふに憧れを持つと思う？ 裕也？』

『うーん……飛びたいから？ かな……？』

『正解は、昔は宇宙そふを飛んでいたからだ』

『……何それ？ 答えになって無いじゃん？』

少年は男と話していた。

少年の歳は6歳位で、男の歳は声からして30前後だろうか？

『……1度経験した事が忘れられない、って意味だ……例えば、裕也が最初にポテチ食べた時、もう1度食べたいって思っただろう？』

『うん！ たしかにそう思った！』

『……それと同じ事なんだよ……解った？』

『うん！ わかった！』

『じゃあ、次は、神様はいると思う……？』

『ううん！ いないと思う……だっていたらみんなしあわせになっているはずだもん！』

『……裕也はとっても頭の良い子だ……じゃあ、この問題も解ける

かな？』

……あれっ？……これは何だっけ？

『たぶん大丈夫だよ！ おじさんにいろいろなこと、おしえてもらったから』

……ああっそうだ……小さい時の裕也だ……

……じゃあこれは『夢』？

『うーん……俺はまだおにいさんなんだけどな……でもこの問題は難しいぞ？ 解けるかな？』

……いや、違う……これは俺の記憶……？

『……もったいぶらないで、早く言ってよ……待ちくたびれちゃうから……』

『ああっ！ ゴメンゴメン……じゃあ、言っよ……』

……この男の人……誰だっけ？

……思い出せない……

『それはね……』

『……それは？』

……この問題って確か……

『人が発明した物で、一番いけない物は何だと思う？』

.....っ

>>>>>

「.....あつあれ？」

俺は自分の部屋の天井を見ていた。

「.....夢か.....でも、確かにあれば、小一の時の俺で.....」

俺は小一の時出来事を必死に思い出そうとしていた。

「.....あの時はあの人から色々と変な知識を教えられていて、変人扱いだったからな.....」

俺は小一の時の思い出に浸り感傷的な気分になっていると、ある事に気付いた。

「.....あの人って誰だ.....？」

その事に気付くと頭を抱えて、本物の作品にそっくりの『考える人』になった俺は、

「.....ああつ~~~~！ もう！ それが解らなくて夢の中でも悩んでいたのに、それを考えなくてどうするよ！ そういえばあの人のおじさんとおじさんと呼んでいた気がするけど.....じゃあ、あのおじさんって誰だあ！？ 何であんなエセ哲学者の下で授業受けていたんだ！？ああつ！ もう訳分んねえ~~~~！！」

と咆哮した。

『第3ターミナル新東京』世田谷区三軒茶屋付近のアパートから、深夜12時だというのに、近所迷惑を考えない男の絶叫が響いたらしい.....

>>>>>

『人は宇宙を目指す』……そんなあの人の問題は本当にそうだったらしく、確かに人類は宇宙を目指すした。

計画名は『バベルプロジェクト』……名前の由来は勿論『バベルの塔』からだ。

この計画は、元々は当時行き詰っていた国際軌道エレベーター建設計画の事だった。

この軌道エレベーター計画は当時、第二次日中戦争が終結したばかりで国際情勢が不安定だった頃、平和のシンボルとして、更に大量の雇用と資材の流通による経済の活性化という名目で、戦後の世界情勢の安定化という形でスタートした。

各国からプロジェクトに参加する技術者、学者、更にスポンサー等が集まり、最初の1年間は順調に事が進んで行った。

だが、最大の出資者だったある航空会社が戦時中に抱えた負債を抱えて倒産、資材運搬用のロケットの数が激減してしまったのだ。

当初の計画では、地球の引力と宇宙ステーションの遠心力が吊り合うポイント、高度3万6000キロの上空から下と、重さを保つ為上に向けて建設していき、長さ5万キロにも及ぶ巨大な代物だったのだが、その運搬用のロケットが無くなってしまった以上、

どのようにして、3万6000キロの上空に大量の資材を運ぶのか？

どのようにして、3万6000キロの上空に大量の人材を運ぶのか？

などといった問題が露呈し、

資材を運ぶためのロケットをどの国が用意するのか？ 更にその費用をどの国が負担するのか？

と、いった政治的な問題にも発展し、これ等の問題が解決しないまま3年が経ち、計画を凍結寸前まで追いやった。

はつきり言つて身から出た錆^{さび}、当時の戦争による赤字の財政状況を考えないままに計画をスタートさせた、因果応報とも言える事件だった。

だがある1人の技術者が、

『地面との接地面を無くし、エレベーター本体を可動する様にすれば、低い高度でも軌道を周る事が可能で、その分資材を送る高度を低く出来、打ち上げ費用も少なくできる』

と意見したのだ。

技術者の名前は須藤眞一^{すどうしんいち}、東大の航空宇宙工学専攻を卒業したばかりの新人だったが、大学当時から独自の発想力を発揮し、それを買われてメンバー入りした人物だった。

彼の計画ではまず、高度300キロの低軌道にステーションを作り、そこから上下に向けてエレベーターを伸ばして行き、上端は高度500キロで、下端は高度2万mの所で伸ばすのを止め、そこに円盤型の直径50キロの巨大なステーションを置く事によって、其処から航空機の離発着によって地上とのやり取りをしようという物で、長さは500キロ(元の1000分の1)に抑えられ、経済的にも工期的にも最小限で済む。空気抵抗による減速は太陽光発電の電力による電気推進によってカバーすれば問題無い。というのが彼の意見だったのだ。

これに当時のチームは大いに揺れた。

反対派の技術者側は、『技術的には可能だが、大気中のステーションが落下した場合の安全性が保証できない』と、安全面に対して訴え、

賛成派のスポンサー側は、『もう、此処まで来てしまったのだから、ここで中止してしまつたら損失は莫大な物になる！ 計画を続行しろ！』と中断された場合の損失に対して訴えかけた。

この議論は1か月に渡り続き、旧約聖書でのバベルの塔の話そのままになったのである。

最終的には何事も無かったかの様に『続行』^{シンボル}が決定され、このターミナルが『金と陰謀から生まれた平和の象徴』^{シンボル}と言われる1つの要因となった。

この『バベルプロジェクト』は2041年から3年前の2079年まで、38年間続き、ようやく全5基の建造が終了し、そのターミナル5基はそれぞれアメリカ、中国、日本、ロシア、そしてEUに分配される事になったのだが、日本がターミナルを手に入れる事になったのは、また政治的な問題が入る。

2023年、日本の古岡康二^{ふるおかやすじ}率いる核融合科学研究所が低温核融合に成功したのだ。

CNFF (Cold nuclear fusion furnace)、この新型核融合炉は、それまでの核融合炉が数千万度から数億度という、何だか訳の分らない温度だったのに対し、数万度という(それでもやっぱ想像がつかないんだけど……)低い温度で核融合が可能になった物であり、『これだけで世界情勢が変わる』と言われた代物である。

だが、このCNFFには謎が多く、公式には『原子核同士の反発する力(クローン力)を弱める事に成功した』となっているが、肝心のその部分の技術を当時の日本政府は秘匿、当然商業用として売られた物を各国は解体、研究をしたが、肝心のクローン力を弱める機構の事がまるで解らず、何故この仕組みで核融合に成功するのか? という研究者から見れば、ブラックボックスの塊だったのである。

この事に、当時のメディアは、『宇宙人との密約があつたのでは?』や『失われたオーパーツを発見したのでは?』などといったオカルト関係のニユースを取り上げ、当時の日本は急激なオカルトブ

ームとなった。これは半年で鎮静化したが、この時の経済効果は1兆円にもなったと言われ、一部の陰謀オタクの間で『この経済効果も狙いの1つだったのではないか?』という声も上がった。

確かに、この時の首相国枝俊充は、経営コンサルタントから政界入りした事で有名で、コンサルタント時代は『剛腕』と呼ばれるほどの逸材、公約には『強い外交路線』を明言するほどであった。

この一連の動きによって日本の赤字は10年という短期間で急速に解消。国力も急激に増していった。

当然この事を不快に思う国もある訳で、中国は日本の低温核融合の技術を公表する様に迫った。

日本がこの事を拒否すると、両国の関係は急激に悪化。中国では日本製品のボイコット騒ぎが起こるなど事態は1年で急速に加速していった。

そして中国が日本海で行った軍事演習中に撃ち込まれた1本の魚雷によって、中国が日本に向けて宣戦布告。これによって中国とその連合国、日本とアメリカ、その同盟国による第二次日中戦争が始まったのである。

この時、アメリカが参加したのは、核融合炉に対する貿易の密約があったとされている。

戦争は2036年から2040年まで続き、最後の1年は核が使われるなどし、およそ5000万人、第二次大戦と同規模の死者を出して終結した。

だが、それらの死者は殆んど中国東海岸で死亡しており、中国がこの50年で作り上げてきた東海部の街を破壊するといった、中国からすれば散々な結果に終わった。

だが日本も、首都東京に核弾頭を撃ち込まれ、首都機能を大阪に移すハメになってしまったのだ。

この事がきっかけで、戦後の経済成長の為に『ターミナル』が作られる事になったのだが、そこで更に各国の思惑が飛び交う事になる。

2057年、6月18日の国連総会。中国は、『ターミナル建造の為に、日本は低溫核融合の技術を世界に公表すべき。もし公表しないのであれば、国際協調の為にターミナル建造の意思なしと見なし、ターミナル建造から一切の権利を放棄して貰いたい』と、意見書を提出したのだ。

つまり、簡単に言えば『核融合の技術を公表しなければ、ターミナルにもつ日本の権限を全て捨てる』という脅迫だった。

当然、日本はそれに断固反対したが、その他各国はその事で何も不利益を得ない、寧ろ利益を受け取る国が圧倒的に多いので、日本は孤立無援の状況に陥ってしまったのだ。

更に議案期間中に政権が交代、結局ターミナルの1基の権限を持つのと代わりに、南太平洋上のある島に国際低溫核融合実験炉、通称イーターツウITER2を建造するという事になったのだ。

これが『ターミナル』を『金と陰謀から生まれた平和の象徴』シンボルと言わしめる要因の2つ目でもある。

だが、これで一旦国際情勢は安定し、2068年にイーターツウITER2も完成し無事に事無きを得た、様に見えた。

だが世界はそんなに甘くなかった。

ターミナル完成から僅か2ヶ月後の8月19日。世界を経済的にだけで無く、本当の意味で揺るがす事件が起きたのだ。

名前は『グランド・ブレイク』、その名の通り大陸を大きく変えてしまった事件である。

この事件は、公式発表ではイーターツウITER2が暴走し、大爆発を起こした事で世界規模の災害を引き起こした事になっているが、その真意は定かで無い……

確かな事は、イーターツウITER2を中心に半径250キロが消滅、衝撃波と余波によって太平洋に面した地域は壊滅したのである。高さ1000mの津波が突然とやって来たら空でも飛ばない限り、逃げられる者は居ないだろう。

その後も上空に上がった塵などに地球上の大部分が覆われ、食糧

危機を引き起こし、この災害で全人口の半分約54億人以上が死んだとされている。……詳しい人数は、3年経った今でも分って無いのだ。

……そんな状況下で、唯一無事だったのが『ターミナル』である。それらの災害の影響で『ターミナル』保有国4ヶ国とEUは、首都機能を『ターミナル』に移し、『ターミナル』を拠点として、今もそのままとなっている……いや、正確にはそのままで無い。

本格的な地上の復興は、塵が治まる5年後とされていて今は完全な放置状態。

他にも、幾ら直径50キロはある巨大な円盤である『ターミナル』でもそこに何億人も住める訳では無い。『ターミナル』の政府は優先順位の高い人物から『ターミナル』に迎え入れ、人口が2000万人を超えた所で、EU以外の各ターミナル政府が独立を宣言。独立国家としてこれ以上の難民の受け入れを拒否したのだ。

これに地上の人々は猛反発したのだが、上空2万mに浮かぶ『ターミナル』にどうやって攻め入る事が出来るのであろうか？ 地上に取り残された人々は結局、地上での生活を余儀なくされたのである。

この事から事実上『ターミナル』は、地上を捨てた』という事になっている。

当然、今までがそうだった様に、これにも『陰謀が隠されている』という声は多かった。

普段なら一部の『陰謀オタク』が勝手に妄想しただけに留まるのだが、今回はそうはいかなかった。

今回の災害の原因とも呼べる施設を作った日本に、他のターミナル政府からの公式な説明要求が無かったからである。

幾ら、今回の災害でのゴタゴタが相次いでいたとはいえ、何時もなら何かと言わせて賠償金をふんだくろうとする連中が、説明責任

を果たせとも言わなかったのである。

これで今回の『陰謀説』に火が付き、各ターミナルでデモ行進が起きたりテロ活動が起きたりした。

しかし、デモ行進については人間はよく出来たモノで、半年もすれば人々の記憶から消え失せていった。

だが、テロ活動については別だ。

元々『テロリスト』って連中は、何かと思想を持った奴よりも、国のアラを探してそこを正当化して金をふんだくる連中が多い為、『第3ターミナル新東京』には、この100年で起きたテロの回数よりも多い数のテロが僅か2年間で起きてしまったのだ。

これに頭を抱えた第3ターミナル新東京政府は1年前、元々からテロ対策チームだった『警視庁公安部』を独立、更に拡大させ独自の武力まで認めてこれに対抗しようとしたのだ。

これにも色々と問題はあったが、無いよりはマシ、って感じのもとで今も活動している。

そして今ではテロリストと公安のイタチごっこが続いている訳である。……………っと。

>>>>>

AM 11:25

「……………ううゝん、やっと終わった……」

日当たりはそれなりだが、色々な物のせいでやけに狭く感じる世田谷区三軒茶屋の、あるアパート主『長瀬裕也』は、パソコンのキーボードから手を離して、手を組み後ろに反らす様に体を伸ばすとはあゝ、とため息をつく。

彼は、そのパソコンを徹夜でやって共に戦ってきた血走った眼を擦ると、思考の海へと足をのばす。

…………… ああゝもう！ 最悪だあの『ハゲ先』！ こんなに面倒

くさいレポートの提出なんかさせやがって!!

ちなみに『ハゲ先』とは俺が通う東大の教授、八毛教授やっげの事だが、そのあだ名の由来は言わなくても解るだろう……

八毛とハゲ、八はちに毛けだから八毛である……

何とも軽いネーミングセンスだが仕方ない……本当にハゲてるのだから……

……まあ、それはいいとして、そのハゲ先から『ターミナルと世界情勢の変化』という難題なレポート提出しろと突き付けられたのだから、さあ大変!

……俺は必死の思いで資料をあさり、徹夜でそのレポートを仕上げたのである……

……俺が1週間前に出された、そのレポートの事を忘れていたのを抜きとして……

……とつ取りあえず、その事については隣のおばちゃんに感謝しなくてはならない!

俺が叫び声を上げた事で怒鳴り込んで来て、その時に紙の山にぶつかった事で、このレポートの存在が明らかになったのだから……

……

……何とも情けない話なのだが、今になつてはどうでも良い……レポートが終わった、って事実だけでご飯3杯はイケる心境だったのだが……

「……はあ、取りあえずこれを今日の1時までに出せば……あれっ?」

そこで俺は気付いた……今が11時26分だという事を……

そこで俺は気付いた……後1時間半しか無い事を……

「……………」

俺はしばらく固まった状態のままで居たのだが、

「まっマズイ!!」

これも時間の浪費だという事に気付いて行動を開始した。

俺は着替えながらこれからの予定について呟く。

「……向こうまでは大体1時間弱、キャンパス内を10分で移動したとして何とかギリギリ……急げば間に合うか!」

俺は着替え終わるとバックを担ぎながらドアを飛び出す。その際につま先をぶつけて痛かったが、気にしている余裕は無い。

ところで何故俺はこんなに急いでいるのか?

それは簡単、ハゲ先名物の『地獄のレポート』があるからである。このレポートは無駄にメンドイ物が多く、いつもこれを受けた生徒は、死んだ魚の眼になる事で有名である。実を言うと、今俺が提出するレポートもその『地獄のレポート』なのである……

流石に2週連続はキツイ! そんな思いで俺は必死なのだ。

俺はダッシュで駆け出し駅に向かう。インドア派で運動は得意な方では無いが、この時にはイケメンで運動大好きでアウトドア派の100m10秒の友人にも勝てる気がした。

その気分は正しかった様で、何時もは15分かかっていた道のりを5分で走破した。

俺はハアハアと、傍目から見たらかなり危ない人をやりながら改札を通る為にP.I.Tを取り出すが………そこで俺は涙が出そうになった……

別にP.I.Tが無かった訳では無い………別の物だ……

それも今回の目的の品……『ターミナルと世界情勢の変化』という『地獄のレポート』がバックに存在しなかったのである……

一方その頃……三軒茶屋のあるアパートの一室では、パソコンの横にレポート用紙の入った封筒が寂しく置かれていたそうだ………

>>>>>

「……と、言う訳です……」

裕也は、あるビルの一室に来ていた。

裕也の前に居るのは、胸元を大きく強調したインナーの上に白衣を着込んで、大胆に太ももをさらしている、明らかに、憧れの保健室の先生的なポジションを獲得している美人である。

恐らく、この人が本当に保健室の先生だったら、この人目当てに怪我をするバカな男子生徒が通常の10倍になるだろう……

そして、憧れの保健室の先生（裕也が勝手に命名）は暫らくウーン、と考える様に椅子に座り込んで居たが、口を開くと、

「……… それにしても貴方、その後もう1回レポート取りに戻って、乗り込んだ電車がテロの為に市ヶ谷でストップ、仕方なく駅から出ると防衛省を占拠したテロリストに遭遇、そのまま逃げ続けると、この計画の首謀者である電脳狂戦士^{エレクトロニクサーカー}、神崎錬と遭遇。更にそこに偵察に来てた美緒ちゃんも現れ戦闘開始、美緒ちゃんが敗れる物の貴方の機転を利かせた行動によって救助、そして『公安』^{こへん}まで辿り着いた、って訳らしいけど……」

と、呆れながら確認をする。

「……ええ、その通りです」

裕也が返事をする、更に呆れてこう言った。

「……貴方、一体どうやってたらそんなに事件が続く訳？ 不幸体質とか何とか説明してるらしいけど……もうこれは貴方の存在自体に問題があるんじゃないのかしら？」

これには裕也も否定は出来ずに、

「………出来れば……早急に調べて欲しいです……」

と藁にもすがる様な声で続けた……

だが、こういう事に厳しい憧れの保険室の先生は、

「………残念だけど……現代医学ではどうする事も出来そうに無

いわね……」

と、まるで余命を宣告する様な医者でそう告げた。

裕也がガックリと肩を降ろすと、

「……千鳥係長……何とかありませんかね……？　これはもう死活問題なんですよ……」

と、祈る様に訴えかけた。すると千鳥と呼ばれた彼女は、

「あら？　その体質のお陰で、どれだけの女の子達にフラグを立てたと思ってるの？　気付いて無いのだとしたら彩音や美緒ちゃん、それにはるかちゃんが可哀そうよ」

と、俺の横のベットに横たわる美緒の事を見た。

「……姉の事は否定しませんが、あの2人は違うと思いますよ？」

裕也はそう言い切った。何故なら裕也からすれば、美緒は裕也の事を使えないヤツ！　と嫌っている様に見えるし、はるかは、裕也に会うと何時もオドオドして、裕也にしてみれば『俺の事……怖がつてる……』と、寧ろ凹んでいるのである。

そんな心情を察したのか彼女は、

「……はあ、相変わらずの朴念仁ね……」

と、彼女は『貴女……苦勞するわよ』と言いたげな眼差しで美緒の事を眺める。

それを察したのか裕也は、

「……だから……違いますよ……」

千鳥の方を見ながら言ってきた。

彼女は更に深く溜息をハアハアと吐いて、

「……何でそんな細かい所に気付くのに、この子の心情を察して上げられないのかしら……？」

愚痴の様に言葉を漏らす。

それにも気付いた完璧に恋心に疎い裕也は、

「……それよりも、今の『状況』を教えてくださいませんか？」
話題を逸らしたのである。

それに気付かない筈の無い千鳥だったが、流石に気を使ってくれ

た様で『状況』の説明をし出した。

「……現在の状況は今までテロとは比べ物にならない物よ……例えば言うなら『都市間交通占拠事件』の10倍はマズイわよ……」

「……そんなにですか？」

都市間交通の時の10倍は危険という言葉に、思わず裕也は聞き返してしまうが『鷹の眼』^{イーグルアイ}と呼ばれ予知にも匹敵する彼女の情報と予測に間違えがある筈が無い。それは紛れも無い事実だと思って良いだろう。

「……ええ、そんなによ………テロリストからはインターネット^{インターネット}に関する全ての情報と、『ターミナル』建設時に関する全ての資料を求めて来たわ……」

「……つまり、低温核融合の技術と『ターミナル』の密約について全て話せ、って訳ですか……」

「……その通りよ」

これは大変な事だ。『ターミナル』は裕也達、『公安』^{シンボル}が言つて良い事では無いが、確かに『金と陰謀から出来た平和の象徴』だ。もしそんな事が漏れるとは思えないし、実際は裕也達もその情報の事について知っている事は本の僅かだが、漏れた場合は世界中で混乱が起きるであろう……そんなレベルの情報ではある筈なのだ。

確かに裕也達もそういつた『裏』の事情に関してはあまり好ましく思っていないが、それでも今情報が漏れてしまえば、地上の復興は更に遅れてしまう……それだけではどうしても防がなければならなかった。

「もし要求が認められない場合は？」

考えたくも無いが、そんな重要な情報を政府がテロリストに渡す事はある筈が無い……今回の事件の結末は、恐らく2通りしか無い。

1つ目は、テロリストグループの全滅。

2つ目は、交渉という名の脅迫に使う筈だった何かが使われる事。

どちらにしても、犠牲は付き物の選択の筈だ……それは避けては通れない事……

つまり『公安』は退く事の出来ない状況に追い込まれたという事でもある。

「……要求に応じない場合は、占拠した3つの『ブロック』のロツクボルトに点火して、ターミナルのほぼ全域を強制分離するそうよ……そうなたら、まず現在の経済体勢は崩壊するでしょうね……」

「……どっちにしても世界規模の混乱はお墨付きなんですよね……」
「……そうよ……」

「……それにしても……強制分離ですか……」

強制分離とは、『ターミナル』緊急時対策マニュアルの内、最も非常時に取る物である。文字どおり、『ターミナル』を『ブロック』

単位で切り離し、分離する事である。『ブロック』とは大体が1キロで区切られた区域の事であり、『ターミナル』はこの沢山の『ブロック』によって形成されている。更に直径50キロもある『ターミナル』が、ただの平面で端の方を支えられる訳が無く、『ターミナル』は中心から端の方に行くに連れて中華鍋の様にせり上がった構造をしている。端の方にかかる重力を、中心部に向けて逃がす為である。そしてそれらの『ブロック』は、カーボンナノチューブ製のロツクボルトによって連結されているのだ。

今テロリストグループが行おうとしているのは、そのロツクボルトを破壊して『ブロック』を切り離す事なのである。しかし『ターミナル』は安全上この1つの『ブロック』を切り離しても、強制分離が行われる程バランスが崩れる事は無い。だが、中心部に近い3つの『ブロック』ならどうだろうか？ 『ターミナル』の圧力バランスが崩れ、恐らく強制分離が起動するだろう。そうなって仕舞えば、各ブロックはその後ロケットエンジン等でゆっくりと着陸するから人的被害は少ない物の、経済的損失は天文学的数字になるだ

ろっ……そうなれば冗談抜きで現在の経済体勢は崩壊するだろう……

「……向こうも本気で来たって事ですかね……？」

裕也が質問をすると、

「ええ、そうね……間違えなく今までのとは格が違う、と考えた方がいいわね……」

彼女は肯定した。

「………今までのも随分と大変だったんですけど……更に厄介になっただけですよね……」

裕也が質問すると、彼女は何かに気付いた様で

「まあ……そうでしょうね……でもテロよりも前に解決しなければならぬ厄介事が増えたみたいね……」

と、言った。

「………？」

裕也は始めはその言葉の意味が解らずに、暫らく首を傾げていたがある音が聞こえた瞬間に、突如として大量の汗をダラダラとかき始めたのである。

その音は千鳥の後ろ側の金属製の扉から聞こえてくる。

ちなみにそれは足音だ。それもアニメで聞く様なドダダッ、という音だ。

裕也はこんな足音を出せる人物を1人しか知らなかった。だからその人物が接近してくる事に冷や汗を流しているのだ……大量に……

そして、遂に足音が扉の前まで来ると、ゴバツ、と勢いよく金属製の扉が開け放たれた。

同時に扉が軋んでいるさなか、裕也はハッキリとその人影を捉えた。

その人影は、華奢な体のラインと双反するポリウムある物体と、その10人中10人が振り返ってしまう様なその容姿を裕也に向けてこう言い放ち、そして抱き付いて来た。

「大丈夫！？ 裕也！！」

「第一章・東京事変」～裕也の長い1日～（後書き）

投稿って大変……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4190n/>

Crack!!

2010年10月8日14時26分発行